

東日本大震災を生き延びたサケをベーリング海で発見！

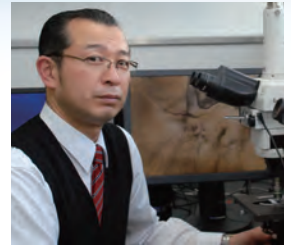
メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産総合研究センター
	公開日: 2024-07-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大貫, 努, 佐藤, 俊平, 浦和, 茂彦
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009796

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



東日本大震災を生き延びたサケを ベーリング海で発見！

さけます資源部 大貫 努・佐藤 俊平・浦和 茂彦



**ベーリング海のモニタリング調査で採集されたサケ標本の中から、
震災時に岩手県のふ化場から放流された個体が発見されました。**

東日本大震災では、太平洋沿岸の多くのふ化場が被害を受けました。岩手県沿岸のほぼ中央に位置する山田湾にも大津波が襲来し、甚大な被害を及ぼしました。その山田湾に注ぐ織笠川にある織笠ふ化場は(写真1)、津波による被害は免れたものの、飼育に不可欠な用水の取水が困難となったため、震災翌日(2011年3月12日)にサケ稚魚を全て緊急放流しました。それらの稚魚には織笠ふ化場特有の耳石温度標識を施された約260万尾が含まれていました。

その中の1尾が、2012年夏にベーリング海で行ったモニタリング調査(水産庁補助事業「国際資源動向要因調査」)で発見されました。このサケは、8月1日に中部ベーリング海の定点(北緯57度03分、西経174度53分、図1)で表層トロールにより採捕された2年魚で、耳石に記録された標識パターン(2,2nH;写真2)から、震災時に織笠ふ化場から放流された個体と判断されました。

ベーリング海は日本系サケにとって大変重要な夏の餌場です。北海道区水産研究所では、水産庁補助事業の一環として、沖合域における日本系サケの資源状態や生息環境を把握するために毎年夏季にベーリング海で調査

船北光丸によるモニタリング調査を実施しています。今回は、採集されたサケ3,702個体を調べ、織笠ふ化場由来魚を含む日本産の耳石標識サケ92個体がみつかりました。

織笠ふ化場由来のサケは、他の日本系サケと共に1年以上かけてベーリング海に無事たどり着いたのです。未曾有の大災害を耐え抜いたサケたちが、大海原でたくましく成長し、復興を遂げつつある故郷の川に一尾でも多く回帰することを願ってやみません。



写真1 震災の翌春の織笠ふ化場。震災時は約1,770万尾のサケ稚魚を生産していた。津波の被害は免れたものの、飼育池と導水管の一部を破壊。現在は完全復旧し、さらに山田湾の拠点として集約施設の新設整備が進められている。

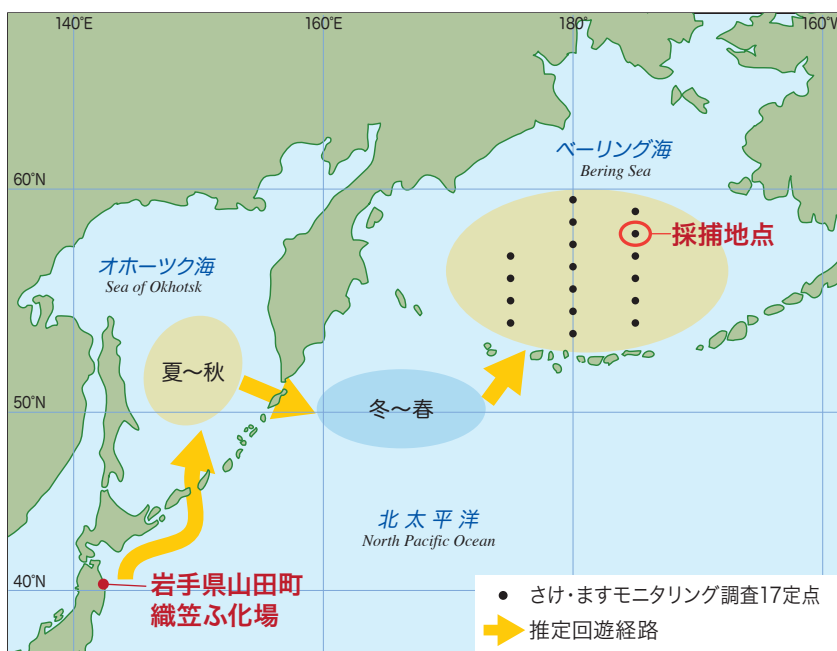


図1 織笠ふ化場と標識魚採捕地点の位置および推定される回遊経路

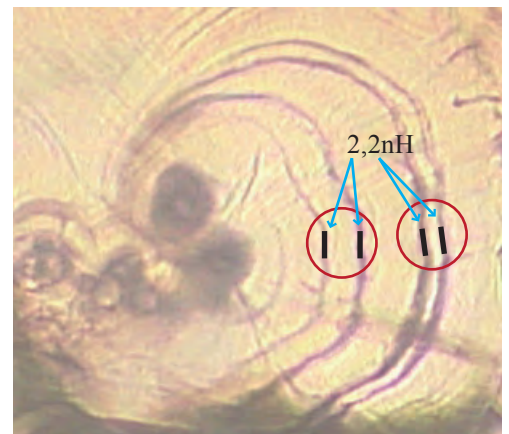


写真2 ベーリング海で発見された織笠ふ化場由来サケの耳石温度標識